慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 文化大革命と知識人 : 呉晗の抵抗とその文学 |
| Sub Title | The cultural revolution and the intellectuals : Wu Han's resistance and his works |
| Author | 小山, 三郎(Koyama, Saburo) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1980 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.39, (1980. 2) ,p.74- 99 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00390001-0074 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 文化大革命と知識人

## ――呉晗の抵抗とその文学――

小山三郎

一　問題の所在
二　呉晗の抵抗とその文学
三　一九六〇年代初頭の政治潮流と文芸政策
四　結　語

### 一　問題の所在

一九六五年十一月十日、姚文元は上海・『文滙報』に呉晗批判論文「新編歴史劇『海瑞の免官』を評す」を発表した。この論文は、毛沢東が姚文元に執筆させたものといわれており、また文化大革命の幕はこの論文によって切って落されたと一般に考えられている。この呉晗批判論文は、以後全国各地の一九もの新聞に転載され、(1)全国的な論争を巻きおこしたのである。

それでは、文化大革命は何故「呉晗」を批判し、彼の京劇『海瑞の免官』を否定することから始まったのであろうか。この問に答えるには、十一月から翌年五月まで続く呉晗批判キャンペーンが、どのような形態で、どのような経過をた

どったのかを考察しなければならない。なぜならば、六ヵ月に及ぶその批判キャンペーンは、文化大革命を指導する人々が何を目的・目標としていたのかを徐々に明らかにする過程であったからである。

この一連の経過を見るならば、呉晗批判キャンペーンの目的はまず彼に「反党・反マルクス主義者」というレッテルをはり、さらにそれ以降五月に鄧拓を批判し、六月に党北京市委員会を改組して彭真第一書記を解任し、七月に党宣伝部副部長周揚を批判するという政治潮流を形成することにあったと言うことができる。すなわち呉晗批判キャンペーンは、文化大革命を指導する人々が後に「劉少奇一派」と呼ぶ人々を攻撃するための前哨戦としての役割を果したと考えることができるのである。

しかし呉晗批判を権力闘争の側面からのみ考察し、彼のスケープゴートとしての役割を強調する場合、そこにはそれによって解明できない幾つかの疑問点が残る。第一に、六ヵ月にも及んだ批判キャンペーンの流れの中には、呉晗を単に「劉少奇一派」を攻撃するために利用しようとする政治的・権力的意図とは別に、終始一貫して純粋に呉晗のイデオロギーに対する批判が存在していたことである。加えて、一九六〇年代初頭に呉晗と意見を共有していた知識人に対する批判が呉晗批判と同時に行われたことであった。第二に呉晗に対する批判は、権力を握っていた人物に対してのものではなく、一九六〇年代初頭に一連の著作活動をした「作家」としての立場にむけられていたことがあげられる。彼が「劉少奇一派」との結びつきで攻撃されたのは、「『三家村札記』を書くのに鄧拓及び廖沫沙と協力した」[2]という点にすぎなかったのである。

こうしてみると呉晗批判キャンペーンを単に権力闘争の側面から、すなわち呉晗をスケープゴートの役割を果した人物としてしかとらえないことは極めて不十分であると言わざるを得ないのである。呉晗は「作家」及び「知識人」とし

て、彼が所有するイデオロギーのために批判されたのであり、それゆえ文化大革命は、一面で呉晗のイデオロギー批判を主要な課題としていたと解釈することができるのである。

それでは姚文元が呉晗をどのように批判したのかを見ることにしよう。彼は呉晗に対し二つの側面から批判を加えた。第一点は、呉晗が「昔を借りて今を諷刺する」手法を使い、中国共産党及びその政策を暗に攻撃したということ。第二点は、学術上誤りをおかしたということであった。この批判は、呉晗が歴史を歪曲し誤った海瑞像を描いたという点と、呉晗の歴史解釈には誤りがあるという指摘を含んでいた。

しかし姚文元論文の主要な目的は、呉晗に対しこの二点を指摘し呉晗の中国共産党にむけた批判を暴露することにあるのではなかったと思われる。ここにおいて姚文元論文の見出しに注意をむけなければならない。彼の論文には、次のような見出しが付けられていた。「『海瑞の免官』はどのように海瑞という人間像をつくりあげているのか？」「『海瑞の免官』はなにをいいふらしているのか？」「『海瑞の免官』はどんなものを人びとに学ばせようとしているのか？」[3]というのがそれである。すなわち、この見出しからわかることは、姚文元が問題にしたのは呉晗の中国共産党に対する批判それ自体にあるのでなく、むしろ批判を導びき出した、その背後にある中国共産党に対する呉晗の「ある種の抵抗の姿勢」にあったのである。彼の批判論文の中に見られる呉晗の著作からの引用が決して歪曲し曲解したものでなく、極めて正確に解釈されていたことを考えれば、姚文元は明らかに呉晗の抵抗の姿勢を正確に読みとっていたものと思える。姚文元が『海瑞の免官』は「毒草」であり「毒を流した範囲もきわめてひろい」[4]とのべた時に彼が見、そして恐らく毛沢東が感じた「毒」とは、呉晗の抵抗の姿勢の中に見たものであった。

本稿の目的は、文化大革命を指導する人々が「毒」としてみた呉晗の抵抗の姿勢とはいかなるものであったのか、そ

してこの呉晗の抵抗はどのように認識されうけとめられたのか、かつ文化大革命が開始された時、何故呉晗が第一の標的とされたのか、を考察することにある。

## 二　呉晗と抵抗とその文学

呉晗にとり、歴史上の人物「海瑞」とは何であったのだろうか。呉晗は何故一九五九年に「海瑞」をもちだし、かつその「海瑞」に何をたくしたのであろうか。以上の点が本節で考察の主要な対象となる。

一九四九年以降の呉晗の著作は、一九五九年から六二年の三年間に集中している。一九四九年以降五九年までの十年間には数本の論文の存在が確認できるにすぎない。(1) すなわち、呉晗は中華人民共和国成立以来十年間沈黙していたことになる。その呉晗が、一九五九年六月一六日『人民日報』に「劉勉之」というペンネームで「海瑞、皇帝を罵る」と題する雑文を突然発表したのである。その後、同年九月二一日『人民日報』に「海瑞を論ず」を発表し、さらに一九六一年一月『北京文芸』に戯曲「海瑞の免官」を発表、二月に北京京劇団がそれを上演するに至るのである。

このように呉晗は、約三年の執筆期間中に「海瑞」に関する雑文戯曲を立て続けに発表した。この一連の作品が文化大革命が開始された際に、「『昔を借りて今を諷刺』し、『桑を指して槐の木にあてこすっていると』」され、「海瑞の宣伝は、マルクス主義に反対し、社会主義理論に反対する呉晗同志の一連の宣伝の頂点をなすもの」(2) と解釈され批判されたのである。

それでは、十年間の沈黙を破り呉晗は何故、突然「海瑞」をもちだしたのであろうか。ここで、「海瑞」に関する一連の著作の主題の中から呉晗の抵抗を見出さなければならない。「海瑞、皇帝を罵る」は、全編次のような海瑞の皇帝

に対する叱責で貫かれている。「あなたは、漢の文帝を見習ったらどうです。あなたも、幾年か前までは、少しはよいことをなさっていた。だが、この数年は、道教に凝ってばかりいて、さかんに土木工事をおこなっておられる。」「一生懸命に道教に凝り、不老長寿のことばかり考えておられるから、お心が惑わされてしまうのです。」[3] このような痛烈な批判は、後に毛沢東を暗に批判し、大躍進政策を暗に攻撃したものと受けとめられたのも当然のことであった。それには幾つかの理由があった。第一に、呉晗の描いた「海瑞」には史実と一致しない点が存在した。[4] 第二にこの作品自体に当時の歴史上の人物を扱った論文と比較した場合、極めて特異な点があった。一九五九年当時の歴史学の分野では、中国の過去の人物をどのようにマルクス主義史観で評価するかという問題にかんして、さまざまな論争が行なわれていた。[5] しかし呉晗が提示した「海瑞」の解釈は、全くマルクス主義史観が適用されていないばかりか、学術的といえるものではなかったのである。なぜなら、この呉晗の雑文は、ただ単に皇帝を罵ることだけに全編を費していた。そこでは、海瑞が何ものも恐れず批判するその勇気が賛美されていた。それゆえこの雑文の主題は、海瑞の抵抗の姿勢にあったと言うことができるのである。

この主題は、それだけ単独で見るならば殆んど意味をなさない。しかしこの主題に一九五九年六月一六日という発表された日付を加えるならば、極めて重要な意味をもってくる。なぜならば、それから二ヵ月後の八月に江西省廬山では中国共産党第八期中央委員会第八回総会が開かれ、「一部の幹部の間にある……右翼日和見主義的な誤った思想を、断固として批判し克服する」[6] よびかけがなされたからである。すなわち呉晗は、「反党反社会主義の逆流がとうとうと流れている」[7] 時期に「海瑞、皇帝を罵る」を発表し、「海瑞の勇気」を賛美したのである。このことは、後に呉晗が「『海瑞、皇帝を罵る』を思想的な武器として、かの右翼日和見主義の逆流のために波瀾をたて」[8] たと解釈される根拠となっ

たのである。

この解釈は極めて妥当なものと思われる。その証拠がさらに呉晗の他の著作の中にも見出されるからである。ここで一九五九年六、七月に「海瑞、皇帝を罵る」と同時に発表された雑文集『投槍集』に眼をむけなければならない。これは呉晗が一九四〇年代に発表した雑文を収めたものであった。彼は序で次のようにのべた。「我々が以前考えてきたこと、語ってきたこと、罵ってきたこと、闘争してきたこと、これは一つの歴史である。そして回想するに値するものである。」(9)

それでは呉晗は、この時期に何故四〇年代を回想するに値すると考え、この雑文集に『投槍集』と命名したのであろうか。これに収められている雑文は、明らかに呉晗が一九四〇年代に国民党政権にむけて「桑を指して槐の木を罵った」種類のものであった。例えば「汚職を論ず」の中で彼は次のようにのべている。「古い帳簿をめくってみて、歴代王朝の覆滅の原因をみ、そのうえで現状を直視して、症状にあった薬石をみつけ出せば、あるいは大きな功業を建てるのに対抗して、小さな補充をすることができるかもしれない。」(10) ここにおいて呉晗は、国民党政権に対し中国の過去の歴史の教訓を提示することによって、その覆滅を防ぐための意見をのべたのである。すなわち呉晗の立場は、蔣介石の「清官」であったと言える。『投槍集』に収められている雑文は、全てそのような呉晗の立場をあらわしていた。そしてこの立場は、「海瑞、皇帝を罵る」の清官「海瑞」と同じ立場であったと見ることができるのである。すなわちここにおいて呉晗は、暗に中国共産党に対する「清官」としての彼の態度を示そうとしたのである。彼は一九四〇年代の雑文を発表することによって、当時の彼自身の立場が一九五九年においても変っていなかったことを表明しようとしたのである。かつ一九五九年に表明された立場は、極めて巧妙に発表当時の原文の修正を含んでいた。それゆえに、後に〝槍〟

の標的は中国共産党であると解釈されたのである。[11]

それでは、共産党にむけられたと見られる彼の意見には、どのような批判が含まれていたのであろうか。『投槍集』に収められた幾つかの主要な雑文の主題を考察し、呉晗の示した〝槍〟を見ることにしよう。

先にのべたように、『投槍集』は呉晗が国民党及び蔣介石に提示した〝治安疏〟の役割をもつ雑文で構成されていた。そして先に示した「汚職を論ず」は、呉晗が示した第一の〝治安疏〟であった。このような治安疏は、さらに「士について」の中で語られる。呉晗は、ここで中国社会における知識人の役割の重要性を語った。彼は、「王・諸侯・大夫はもしも士の支持をうることができなかったとすると、政権が崩壊するばかりでなく、一家一身をも保つことができない」[12]と士の役割を高く評価した。そして現在、「士の社会的地位を高め、文事と武事を両方重んずべきであり、政治的水準と社会的地位を等しく高める」[13]ことが今後の課題であるとした。ここにのべられた「今後の課題」とは、国民党及び蔣介石に対しての提言であった。

第三の治安疏は、「三百年前の歴史的教訓」に見られる。呉晗は、「歴史は一枚の鏡であるから、三百年前に、追想に値することがらはあまりに多い」とのべ、三百年まえの明朝の腐敗ぶりを「官僚から地主、将軍から文士にいたるまで誰もが、自分の楽しみや児女の幸福を考えるだけで国家民族の前途を考えようとしなかった。個人の頽廃社会の腐敗はその時代の滅亡を宣告した」とのべ、「三百年後に、われわれが三百年前の事情をよく考えてみれば、殷鑒遠からず、夏后氏の世にあり、である」[14]と中国社会を諷刺したのである。

さらに彼は、「明末の『流寇』を論ず」で、「君臣はいずれも亡国の責任者であり、独裁、専制、さらに無能の結果自ら墓穴を掘った」とのべ、その際におこる「流寇」の蜂起は、「社会組織が崩壊するさい、かならずみられる現象」[15]

であるとした。そして呉晗は、「流寇」の蜂起は「飢餓によって窮死したくないということでしかない」とし、広大な農民大衆は「同様に飢餓戦上で懸命に頑張っている人々」だから「流寇」を歓迎しているとのべた。[16] 呉晗の他の雑文[17]と共に推測すると、この流寇は中国共産党を指すものと思える。しかし彼の雑文は、共産主義者の立場から書かれたものではなかった。なぜならば、これらの雑文は流寇を生みだした中国社会の政治的・社会的堕落にその主眼をおいていたからである。

こうした雑文が一九五九年に出版されたことには、いかなる意味があったのであろうか。呉晗にとり、この一九五九年、すなわち大躍進政策の失敗が明らかになった年は大きな意味をもっていたものと思われる。『投槍集』は大躍進政策の結果をみて出版された。彼は、そこに中国社会の堕落を見たのである。農民の悲惨な状況、知識人の役割の低下、文化の「殺戮」[18]現象、こうした国民党政権下で発表した主題は、彼にとりすべて一九五九年の中国社会にあてはまったのである。

「右翼日和見主義」分子の出現は、この当時の彼に発言の機会を与えた。[19] この風潮の中で彼は、中国が国民党政権から共産主義政権に変っても変ることのなかった彼自身の立場及び意見を発表したのである。こうした呉晗の抵抗は、以後さらに激しい形をとって出現する。「海瑞、皇帝を罵る」から三ヵ月後の一九五九年九月十七日に発表された「海瑞を論ず」は、国内にふきあれる反右派キャンペーンに同調するかに見せながらも、その主題はより発展し『海瑞の免官』に近づいている。「退田」という主題がはじめて導入されたのは、この雑文においてであった。呉晗が描いた「海瑞の闘争」は、封建地主制に対する闘争ではなく、土地を不法に取りあげた皇帝と封建官僚にその土地の返還を要求するものであった。さらに呉晗は、海瑞を郷愿や甘草を批判する人物として描き、「海瑞を研究し、海瑞に学び、海瑞にたい

する歪曲に反対するのは、有益であり、必要であり、現実的な意義がある」[20]とのべ、海瑞の精神の学習をよびかけたのである。

「海瑞を論ず」は、当時の反右派キャンペーンに対応する形で書かれていた。しかしそれは、彼に対する批判の〝隠れ蓑〟を含んでいた。確かに彼は、一九六五年一二月二四日に「『海瑞の免官』の自己批判」の中で、「海瑞を論ず」は「その当時、右翼日和見主義に反対し、名儀を詐称し、海瑞を歪曲したのに反対したものである。」[21]と自己弁護している。しかしその自己弁護の根拠となっていた「海瑞にたいする歪曲に反対するのは、……現実的な意義がある」という「右翼日和見主義者」を批判したようにみえる文章は、本文の内容とは関係なく単に最後に付けたされたものにすぎなかった。こうした呉晗の抵抗は、この時期批判されることなく見のがされた。呉晗はこの情勢を見きわめ一九五九年末から戯曲『海瑞の免官』を執筆しはじめる。

一九六〇年代初頭は、呉晗が最も大胆に発言する時期である。この時期、彼は戯曲『海瑞の免官』の他に、三つの雑文集を出版している。一九六〇年の『灯下集』、一九六一年の『春天集』、さらに日本において未見であるが『学習集』がそれである。この時期は、後に考察するが、大躍進期とは対照的に知識人に対する思想統制が極めてゆるめられた時期であり、学術分野においても専門知識が重視された時期であった。すなわちこの時期には、『紅』よりも『専』が重要視されたのである。この風潮の中で呉晗の一九五九年以来の抵抗はより明確にその輪郭をあらわした。彼の抵抗は『灯下集』、『春天集』の雑文の中に収められ、豊富な話題を通して一貫した主題を追求していた。

これらの雑文を通して初めて歴史学者呉晗の歴史観があらわされた。彼は『灯下集』の序において「青少年が読む本はたいへん少い。彼らの知識を求める願望は強く、良い本に対する要求には切実なものがある」と主張し、この雑文集

はこのような状況の下で「すこしばかりの歴史の知識を提供し人々の文化生活を豊かにする」[22]ことを目的としているとのべた。以上のことから呉晗は教育、より狭義に言えば歴史教育に眼をむけていたことがわかる。[23]この分野こそ呉晗が彼の抵抗の〝砦〟とした領域であった。この〝砦〟の中から歴史上の人物「海瑞」が登場し、戯曲『海瑞の免官』が生まれたのである。

彼の歴史観は、雑文「厚今薄古と古為今用」の中にのべられ、かつまた大躍進政策に対する直接的批判を伴っていた。彼は次のようにのべている。「現在を重視し、過去を軽視するよびかけは、文化学術界と教育界の各部門で熱烈な賞賛を得た。特に去年の大躍進以来、科学研究と大衆運動が結合し、……少なからぬ成積をおさめた。……（我々の文化学術戦線上の成積は巨大なものであるが）しかし現在を重視し過去を軽視する政策には、幾つかの問題が存在する。……軽視すべきでないところまで過去を軽視し、それゆえ次の世代に祖国の過去それに未来を正確に教育し理解させえないならば、それは明らかに正しくない。[24]」さらに続けて彼は、「現在は正しく昔は誤り」であるとする見解を批判し、「マルクス・レーニン主義の規準にあわない過去のすべての活動は誤りである」[25]とする人々に対し異議を唱えた。このように呉晗は、大躍進期に見られた学術・教育分野に対する教条主義的傾向を批判した。そこには呉晗の歴史観―歴史主義[26]がのべられ、学術・教育を損う恐れのある風潮に批判がむけられていたのである。

さらに呉晗は、『春天集』においてその矛先をより直接的に毛沢東思想にむけるのである。「歴史戯を論ず」において呉晗は次のようにのべた。「私の理論水準は、たいへん低い。私は歴史科学の研究がマルクス・レーニン主義それに毛沢東思想をその指針にしなければならないことを知っている。しかしマルクス・レーニン主義及び毛沢東思想が歴史の替りになることができるとは、いままで聞いたことがない。[27]」ここにおける呉晗の立場は、学問・思想の自由の擁護に

あった。そしてこの立場は、当然「百家争鳴」の提唱となって現れる。

「神仙会と百家争鳴」、「再び神仙会と百家争鳴を談ず」の二つの雑文に呉晗のこの立場が明白に現れていた。その中で彼は次のようにのべている。「ある人は、彼らがブルジョア階級の学術観点を所有していることを暴露されることに恐れを抱いている。……しかし私が見るところ、そのような心配は不必要なものである。我々が受けてきたのはブルジョア階級の教育であり、我々は幾年もの間、古い社会に生活し活動してきた。誰の頭の中が完全にきれいになっているというのか。」[28] さらに呉晗は、毛沢東の言葉を一言も逃さず記憶し代弁する知識人に対し、「しかし自分自身の意見はあるのか、……そこには幾つかの引用はあるが彼ら自身の声はない。こうしてだめになっている」[29]と諫め、彼らに「百家争鳴」を呼びかけたのである。

これは呉晗の中国知識人にむけられたメッセージであった。そこには自分の頭で考え、敢然と発言し、学問を損ねる教条主義に反対する呼びかけが含まれていた。こうした呉晗の抵抗は、一九六一年に発表された戯曲『海瑞の免官』の中で結実する。『海瑞の免官』の中では、「退田」、「『甘草』に反対し、『郷愿』を罵る」、「除覇」、「寃罪をそそぐ」が主題としてとりあげられていた。姚文元は、これらの主題をことごとく「古を用いて現代を諷刺する」ものとしてとらえ、それに反論した[30]のである。しかし姚文元の批判の焦点は第一章でのべたように「海瑞の抵抗の姿勢」にあった。それはとりもなおさず呉晗の抵抗の姿勢であった。海瑞は先にのべた五つの主題を実行したために「免官」されたのであった。それゆえ「免官」には呉晗のどのような意図が含まれていたのかを考察しなければならない。

この海瑞の「免官」は、一九五九年九月に失脚した国防部長彭徳懐をなぞらえたものとして受けとめられた。しかし呉晗は、「海瑞」を「彭徳懐」になぞらえ、戯曲の中心主題としたのではなかった。呉晗にとって彭徳懐は、単に海瑞

の精神を体現したものにすぎなかった。なぜならば呉晗は、「海瑞」の失脚を嘆くよりも、「海瑞」の敢えて不正に対して立ちあがって発言する勇気を称えていたからである。この戯曲は、「剛直でおもねらず、失敗したらもう一度やるという、海瑞の強固な意志に重点をおいて書」[31]かれたものであった。それは、彼が「海瑞、皇帝を罵る」を書いて以来、一貫してきたことであった。呉晗は、『海瑞の免官』の「序」で次のようにのべている。「敢て考え、敢て発言し、敢て行うことは大躍進以来の新しい風格である。私の書いた戯曲も、この敢ての中に属するものである。もし敢て行動しないならば、なにものも成しとげることができない。ただ敢て行いさえすれば、少くとも何かはできる。……人類社会の発展の歴史は、敢て考え、敢て発言し、敢て行動する人々の歴史である」[32]。さらに呉晗は、歴史家に彼の例にならって新しい歴史劇を書くよう提唱した。

このように呉瑞は、清官「海瑞」に彼自身をたくし、大躍進政策を暗に批判し、さらにその批判の拡大を他の人々に暗に呼びかけたのである。呉晗を批判する人々は、この点を正確に読みとっていた。彼らは呉晗が「人民によって『免官』されてしまった右翼日和見分子に失地回復を呼びかけ」[33]たと解釈したのである。しかし、呉晗の批判は単に中国共産党の政策批判だけにとどまらなかった。すでにのべたように呉晗の抵抗の〝岩〟は、歴史学の学術分野であった。彼は、そこで学問思想の真の自由を要求していたのである。彼の歴史観は、歴史主義とよばれるものであり、マルクス主義の史観、さらには毛沢東の歴史観とは異るものであった[34]。姚文元がのべたように、呉晗にとって「階級闘争は、歴史を押し進める動力で」[35]なかった。「海瑞」は、このような歴史観から生まれたのである。

以上からわかることは、「海瑞」には呉晗の二つの抵抗が託されていたということである。すなわち一つは歴史を階級闘争の観点からみるマルクス主義にむけられていた。二つには、中国共産党の政策にむけられていた。しかしこの場

合、彼は単に「右翼日和見分子」を擁護したのではなく、究極的には「右翼日和見分子」をも含む中国共産党そのものを批判していたと解釈すべきであろう。

こうした呉晗の抵抗は、大躍進政策のまき起した絶望的な情況に対する反応であり、かつ毛沢東の支配力が弱まったという認識[36]から導びき出されたものであったと思える。しかしこのような呉晗の抵抗は、いかなる中共指導者の下でも容認される性格のものではなかった。それにもかかわらず彼の抵抗は確実に批判をうけることなく存在した。そればかりか批判者の眼には、「これをたたえた文章があとからひきもきらず影響は非常に大きい」[37]ものと映った。

そこで問題となるのは、呉晗の抵抗は何故一九六〇年代初頭に批判をうけることなく受け入れられたのか。かつその中で呉晗が流した「毒」とは何であったのか。そうした状況を文化大革命を指導した人々はどのように認識していたのかを考察しなければならない。

## 三　一九六〇年代初頭の政治潮流の文芸政策

本章では呉晗の抵抗を容認した一九六〇年代初頭の政治潮流と文芸政策を考察の対象とする。

中国共産党は、一般に経済調整期といわれているこの時期に、大躍進政策がもたらした経済的混乱を収拾する問題に直面していた。そうした中で一九六一年以降、党は大躍進政策の抜本的改革を行った。この経済政策の変更は、知識人の協力を緊急に必要とするものであった。それゆえ党の知識人政策も一九六一年以降、大躍進期とくらべ、一八〇度転換したのである。

この時期の党の知識人政策は、一九六一年に百家争鳴の呼びかけ[1]とともに始まった。このよびかけは、同年八月の陳

毅の演説の中に具体的な形をとってあらわれた。陳毅は次のようにのべた。「我々が専門学習を重要視しないならば、我国の科学文化は永遠に遅れるものとなろう」と。さらに知識人に対して「工作において結果を示し、社会主義の建設に貢献する限りにおいて」彼らの政治活動の有無は問わないと。ここでは専門知識のもつ重要性、知識人の役割の重要性がのべられ、彼らとの協力関係が求められていた。この要請はイデオロギーの問題に関しても、「思想改造は、長期的な曲折した過程である」ので現在完全にマルクス主義に精通している必要はないという譲歩となってあらわれていた。さらに陳毅は、革命に参加して四〇年たった現在、思想的にまだ「紅」く染まっていないと自らを引きあいに出してのべたのである。(2)

このようにして中国共産党は、「大躍進政策を通じ、特に幹部と知識人の間で広まりつつあると党が認識したギャップをふさごうとし」、(3)知識人に協力をもとめたのである。この知識人に対する政策は、科学分野だけでなく徐々に人文科学の領域にも適用されるに至る。文学の分野では、「社会主義リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合」という大躍進期の文学理論は、もはや唯一の文学理論として提示されなくなった。しかしこのような政策に対して、知識人の側は懐疑的であった。彼らは自分の意見を発表し、学術上の論争に従事することを拒絶したのである。むしろ、この時期毛沢東批判は別の方面からおこってきた。それはこの緩和政策を遂行していた党宣伝部及び北京市党委員会からのものであった。

この組織が文学・芸術論争の中ではあるが、暗に毛沢東批判を行いえたのは、大躍進政策以後党内の指導者間に分裂が生じていたことをあらわすものであり、またそうした批判を許す勢力があったことを示している。確かに彼らの批判は、その矛先を大躍進政策の破綻、毛沢東の指導及び彼のイデオロギーに向けていたのである。

まず党宣伝部官僚の批判は、大連会議においてなされた。一九六二年八月に周揚によって主催されたこの会議は、短篇小説の議論のために招集されたものであったが、実際には「大躍進期をつうじて没落した農民の悲惨な状況・貧困を描くように作家に要求した場となった」[4]のである。この会議において康濯は、現在の主要な矛盾は資本主義と社会主義の間のものではなく、社会主義指導者のイデオロギーと実際の農民の要求の間に存在するものであると指摘した。[5]同時に邵荃麟は、「中間人物論」を展開し、康濯と同様に社会の矛盾は異った階級間のものではないと主張した。しかし彼は、矛盾は個人の心に存在するものであるとし、農民・プロレタリアートを完璧な英雄として描くのではなく、革命に対して態度を明らかにしていない中間人物を作家は描かなければならないと主張した。[6]

この二人の作家の主張は、英雄を描かなければならないとする毛沢東の文芸論に直接抵触するものであり、指導者の描く農民像と現実の農民像にはギャップがあることを暴露し、さらに社会の矛盾を指摘するものであった。こうした文芸路線の中で大躍進政策を暗に批判し、毛沢東のイデオロギーを暗に攻撃する京劇が出現するのである。それは田漢の『謝瑤環』であり、呉晗の『海瑞の免官』であった。呉晗の「抵抗」は、こうした文芸路線の中で行われたのである。

毛沢東の政策とイデオロギーに対する批判は、さらに北京市党委員会にも存在した。市党委員会第一書記の鄧拓は、一九六一年三月から約一年半にわたって『北京晩報』に『燕山夜話』と題し一連の批判的随筆を掲載した。彼もまた歴史上の人物事件に現在を投影し、政策批判を行ったのである。彼の随筆には、三つの主題が存在していた。大躍進政策の結果、没落した農民への同情・毛沢東の経済政策及びイデオロギーに関する批判・「右派分子」として批判されたものへの擁護がそれである。彼はこうした主題を通じ、すべての政策は実施されるまえに慎重に研究され、さらに指導者は農村に行き、大衆の感情をはば広く調べなければならないと主張した。この主張は、学問・研究の重要性、それに農

民の悲惨な現状に配慮するものであった。そして鄧拓は、大躍進政策を実際の経済原則にもとづかず、現実とは無縁の単なる夢であるとして批判したのである。

当時、このような鄧拓の批判は彼一人のものではなかった。北京市党委員会の呉晗や廖沐沙が鄧拓と協力し、一九六一年十一月から『前線』に『三家村札記』と題し、『燕山夜話』と同じ種類の随筆を発表していた。鄧拓の批判と一九五九年以来の呉晗の中国共産党に対する「抵抗」は、ここに奇妙にも合体したのである。

しかしここで問題となるのは、呉晗の抵抗は中国共産党及びそのイデオロギーであるマルクス主義にむけられたものであったにもかかわらず、何故党官僚の鄧拓との協力関係が成立したのかという点にある。それでは鄧拓の批判は、どのように説明できるのであろうか。

彼の批判は当時の中共指導部を特徴づけていた性格と密接な関係をもっていた。大躍進政策以後毛沢東に代って出現した党指導者は、ドーク・バーネットの言葉を借りるならば「非毛沢東主義的」であった。彼らは、「毛沢東が強調しなかったり、蔑視しがちであったある価値に高い優先性を与える傾向をもっていた」のである。そのような傾向を持った彼らは、「（マルクス・レーニン主義のイデオロギーの枠のなかで）個人の創造性の重要さ」を一九六〇年代にもとめ、「中国では、『社会主義』と『資本主義』の間の基本的な闘争が……終ったのであるから、……階級闘争を強調せず、今まで以上に社会関係を調和させるようにすべきである」[7]と主張したのである。このような主張が党宣伝部の官僚・康濯・邵荃麟の発言の中にあらわれていたことはすでにのべた。そして鄧拓もこの立場をあらわしていたものと思える。なぜならば彼は社会主義建設の中における個人の創造性の重要さを主張したのであり、毛沢東に対するイデオロギー批判も社会主義建設の方法論の違いから起こったものであったからである。この点で鄧拓と呉晗の立場は異っていた。[8]む

しろ二人の立場は対立していた。しかし大躍進政策の混乱を経験した鄧拓ら党官僚は、すでにイデオロギーの純粋性を犠牲にする傾向をもっていた。それゆえに呉晗との共存関係が成立し得たのである。

一九六二年九月、毛沢東は中国共産党八期十中全会で再び階級闘争の必要性を強調するスローガンを復活させた。毛沢東は、自分にむけられた批判の中に「反革命的陰謀」を感じとり、その批判を停止させようとしたのである。ここにおいて、一九六〇年代初頭を特徴づけていた知識人に対する緩和政策は終りを告げた。このような状況の中で、「三家村グループ」はすでに退却していた。鄧拓は十中全会が開催される直前の九月二日、「三十六計」の中で安全に退却するには三十六計がいちばん良い戦略であると述べ、『燕山夜話』を終結させた。呉晗も同時に沈黙した。

しかし一九六二年九月の毛沢東演説は、学術分野に新たな論争を引きおこす導火線となった。その論争は、「歴史を動かす原動力・現代における伝統価値の役割・人間性に関する」[9]ものであり、毛沢東思想の根底にある階級闘争を疑問視するものであった。ここに呉晗の放った「毒」は、他の知識人にうけつがれたのである。

この論争は、毛沢東の演説の一月後の一九六二年十一月に開かれた孔子学術討論会にはじまった。ここで歴史家劉杰は、中国の歴史は西欧の歴史発展とは異った形態をもち、階級闘争は西欧の歴史発展を支配したかも知れないがそれは中国史の発展を支配・統治しなかったとのべた。そこでは階級闘争を強調することに対する異議、中国社会の調和への願望がのべられていた。マール・ゴールドマンは、この調和という願望を、「大躍進をつうじて起った激しい社会・経済の混乱に反応したものであったばかりか、中国の遺産、すなわち社会関係における儒教の調和の概念、道教の宇宙との調和の概念」の表現としてとらえ、知識人と毛沢東主義者との論争を、伝統的中国の調和及び折衷の価値観とマルクスをとおして毛沢東に流れこんだ西欧の弁証法の価値観との衝突であると解釈している。[10] 中国人古来の歴史観と階級闘争

を原動力とみなすマルクス主義の史観は、根本的に相容れぬものであった。十中全会以後、知識人はこの調和という概念を提示することにより、毛沢東の階級闘争のよびかけを拒絶したのである。

このようにして、毛沢東のイデオロギーそのものが拒絶された。しかし、この批判を行った知識人に対する党の態度は、極めて優柔不断なものであった。一九四九年以降、知識人に対する思想統制及び整風運動は、周揚の指導の下に行われてきた。しかしこの時期、周揚自身が一九六三年十月まで毛沢東の政策にそむいていた。[11] 加えてその後一九六三年十二月の毛沢東の「文学・芸術についての指示」に対する党宣伝部の反応も、一九六四年の楊献珍にむけられた整風運動も極めて不十分なものであった。[12] 党宣伝部は、毛沢東の階級闘争の要求に賛成していた。しかし実際には大躍進政策が引き起したような混乱が再びおこることを恐れた彼らは、以前のような大規模な整風運動を行うことをしなかった。

こうした状況に直面した毛沢東は、すでにこの時自分の望む革命が現体制の下で成し遂げることは不可能であると感じたに違いない。さらに彼の眼には、中国共産党は変質しつつあると映ったものと思われる。[13] 一九六五年彼は、中国共産党内部からの説得工作を捨てた。一九六五年九月、政治局会議において、毛沢東は彭真に呉晗を批判するように要求し、党中央の修正主義の危険性に対して警告した。しかし彭真からは何の反応もなかった。この会議直後、毛沢東は上海にむかったと報告されている。彼は以後中国共産党の外部から、林彪指揮下の人民解放軍、姚文元などの若いイデオローグ、江青さらに華東局の柯慶施などの支持の下で党中央に対する批判へとむかうのである。

一九六五年十一月十日の姚文元論文「新編歴史劇『海瑞の免官』を評す」は、このような状況の中で書かれたものであった。呉晗批判論文が「派閥のはっきりしない」姚文元のような知識人によって書かれ、地方新聞『文滙報』に発表されたのは、毛沢東が「国や地方レベルの党指導者たちがこれに対してどのように反応するかをみようとしたため」[14]だ

と推測されている。これ以後、姚文元論文は全国各地の新聞に転載され、さまざまな討論、論争をまきおこした。[15]

すでに彭真は、この状況を無視することができなかった。しかし彼は、この時、学術論争にこの問題を限定することで呉晗批判の本質を避けようとした。このことは彼にむけられた罪状の一つであるが、彭真がそうしたことは十分考えられることである。[16] 一九六六年五月、毛沢東は「この偉大な戦いの目的は、呉晗と反党・反社会主義ブルジョア代表を批判することであった」[17]（傍点筆者）とのべたといわれる。ここにおいて毛沢東は明らかに呉晗と党幹部を分けて考えていたことがわかる。文化大革命の渦中で、これら党幹部が修正主義者というレッテルをはられたのは、一つには呉晗との関わり合いによるものであった。

一九六〇年代、呉晗は「毒」をまいた。彼は一九六〇年代初頭の政治潮流をうまく利用して、彼自身のキャンペーンを展開した。毛沢東は、その「毒」に対し再三警告を発した。しかし「劉少奇一派」はそれを放任した。むしろ彼らは呉晗と協調関係にあった。かつ呉晗を利用した形跡さえある。[18] それゆえ、毛沢東は彼らを〝修正主義者〟と見たのである。要するに、文化機構内部の指導者の粛清の原因は、呉晗との連座関係にあったのである。

## 四　結　語

一九五九年六月呉晗が再びペンをとった時に示した思想的・政治的立場は、一九四九年以前の彼の立場と同一のものであった。一九四九年以前、彼が国民党に示した抵抗は、国民党の支配下で中国社会の堕落を生み出したと彼が考えたもの、すなわち農民の悲惨な状況・知識人の役割の低下・文化の殺戮現象への批判であった。そして、その中国社会の堕落を、彼は毛沢東の「大躍進政策」の中に再び見出したのである。第二章で考察した『投槍集』は、一九四九年以前

に国民党にむけた批判的雑文を収めたものであるが、一九五九年に呉晗は同じ〝槍〟を共産党にむけたのである。彼がその雑文を復活させたという事実は、一九四九年以前に国民党にむけた批判が一九五九年に中国共産党政権にも適用できると考えたからに他ならない。

それ以後の彼の共産党及び毛沢東に対する批判は、「昔を借りて今を諷刺し」「桑を指して槐の木を罵る」手法をもって存続した。その批判は、一九六〇年代初頭の共産党指導部によって黙認された。党宣伝部と北京市党委員会の党幹部も、毛沢東の政策を暗に批判していた。呉晗の抵抗は、彼ら党幹部の批判と奇妙なまでに一致していた。しかし第三章で考察したように、党幹部の毛沢東批判と呉晗の抵抗とは明らかに異っていた。文化大革命を指導する人々は、一九六六年に呉晗の抵抗の本質をあばきたて粛清の対象とした。しかしこの時期党幹部は隠れた毛沢東批判のために呉晗を利用した。

毛沢東にとって問題となったのは、こうした知識人の隠れた毛沢東批判であった。毛沢東は、このような一連の知識人の活動から、一九六二年九月、党に「階級闘争を決して忘れてはならない」と要求した。この発言は、当時経済状況が好転しつつあったことから、さらには自分にむけられた批判を停止させることを意図したものであったと思われる。さらに彼は、一九六四年六月に「これら文芸界の新聞や出版物の大半は、過去十五年間、基本的には党の政策を実行していなかった」として全国文学芸術界連合界と各所属協会を批判したのである。毛沢東のこうした呼びかけは、批判的知識人に「彼らが反革命的陰謀に従事していると警告するもの」(1)であった。かつ、二度にわたって呼びかけたことは、それだけ知識人の抵抗が執拗で、それに対する党幹部の姿勢が優柔不断であったことを裏づけるものでもあった。

しかし、こうした状況の中で毛沢東は、ただ単に階級闘争を呼びかけ、知識人に警告を発しただけではなかった。彼

はすでに文化大革命にむけて布石を打っていたのである。彼は一九五九年以来林彪を起用し、軍内部の宣伝機に目をむけはじめていた。なぜならば、「機能の幅と浸透の深さという点では、軍の政治宣伝機構は文民の宣伝組織に匹敵する」[2]ものであったからである。この軍の宣伝機構は、一九六三年以降、党宣伝部の活動領域の中に入りこみ、徐々にそれをしのいでいく。[3] さらにこの時期、毛沢東は江青に京劇改革を行なわせた。これも、毛沢東が文化大革命を準備する布石の一つであった。江青の提唱した京劇の改革は、党宣伝部と衝突したばかりか、彭真との対立をも引きおこすに至った。その対立は彭真と毛沢東の対立を意味し、呉晗の『海瑞の免官』をどう扱うかの問題を含んでいたのである。

文化大革命前夜は、以上のような状況にあった。文化大革命において周揚が失脚し、彭真・劉少奇が失脚したのは、アラン・P・Lリューの言葉を借りれば、「彼らがしたことよりも、彼らがしなかったこと」[4]に原因があった。すなわち彼らは呉晗の抵抗を許し、彼が放った「毒」を取り除こうとしなかったために追放されたのである。

毛沢東の眼に、呉晗はどのように映ったのか。恐らく呉晗の抵抗は、彼が長い間消滅させようと努力してきた魔力をもった〝ブルジョア思想〟の新らたな出現」として、さらに毛沢東思想の思想改造が失敗したその象徴として彼の眼に映ったにちがいない。[5]

文化大革命が開始された時、毛沢東の示した知識人に対する不信感、中国の文化、さらに文学に対する徹底した不信感は、すでにのべてきたように、知識人の毛沢東に対する抵抗、さらには、党宣伝部の毛沢東文芸路線からの離反がその主要な原因となっていた。そして、その中で毛沢東に対する最大の抵抗は、呉晗によるものであった。彼は、自分の頭で「敢て考え、敢て発言し、敢て行動」[6]した人物であった。呉晗のこの〝あえて〟[7]の精神が、呉晗の失脚にむすびついたのである。

## 第一章

(1) 李寧博士著『呉晗傳』(香港・明報月刊社出版一九七三年八八頁)

(2) James R. Pusey, *Wu Han*, Harvard East Asian Monographs 1969. P. 57

(3) 姚文元「評新編历史劇『海瑞罢官』」(『人民日報』一九六五年十一月三〇日)(邦訳『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第一巻、一九七〇年東方書店出版部二〇一頁―二二一頁)

(4) 同上二一八頁

## 第二章

(1) 呉晗が一九四九年以後五九年にかけて出版したのは一九五七年『読史劄記』及び『春天集』に収められている「新的中国、新的人民」、「我克服了〝超阶級〟观点」、「我憤恨我控訴!」の三つの雑文にすぎない。

(2) 戚本禹「海瑞罵皇帝和海瑞罢官的反动实質」(『人民日報』一九六六年四月二日)(邦訳『中国文化大革命』弘文堂一九六六年一七二頁)

(3) 劉勉之(呉晗)「海瑞罵皇帝」(『人民日報』一九五九年六月一六日)(『中国文化大革命』一六一頁)

(4) この指摘は多くの批判者からなされた。この分析は Peter R. Moody, *Opposition and Dissent in Contemporary China*, Hoover Institution Press. 1977. P. 31 に詳しい。

(5) この現象は中ソ対立に起因するものと思える。中国知識人は彼らの眼を外にむけることができなくなり、それゆえ中国の過去に彼らの興味はむかったものと思える。この傾向は一九六一年以降、さらに激しいものとなる。中国共産党は、中国のナショナリズムを高揚できるためこの傾向を押し進めた。
Albert Feuerwerker and S. Cheng, *Chinese Communist Studies of Modern Chinese History*. Harvard East Asian Monographs. 1961. P.P. vii - xxv. に詳しくのべられている。

(6) 呉晗「関于『海瑞罷官』的自我批評」(『人民日報』一九六五年十二月三〇日)(『中国文化大革命』一六五頁)

(7) 戚本禹論文一七四頁

(8) 同上

(9) 史紹宾「評呉晗的『投枪集』」(『紅旗』一九六六年六期)

(10) 呉晗「論貪汚」『投枪集』(邦訳『現代中国文学』12評論・散文河出書房新社一九七一年三三八頁)

(11) 史紹宾論文には、附件として「呉晗一九五九年編的『投枪集』是怎样〝作伪舞弊的〟的?」がつけられ、発表当時の原文と『投枪集』の本文の比較がなされ、このことから史紹宾は〝枪〟の標的は中国共産党であると断定している。

(12) 呉晗「説士」『投槍集』(『現代中国文学』三四三頁)

(13) 同上

(14) 呉晗「三百年前的歴史教訓」『投槍集』(『現代中国文学』三五一頁)

(15) 呉晗「論晩明『流寇』」(『現代中国文学』三五一頁)

(16) 同上三五四頁

(17) 『歴史的鏡子』(生活書店一九四六年)に含まれる一連の作品との比較による。James R. Pusy, ibid. P. 5

(18) 『現代中国文学』には『投槍集』として「文化の殺戮を論ず」を収めているが、李又寧博士著『呉晗傳』の『投槍集』に関する目次にはこの雑文の題名は見あたらない。しかしこうした国民党政権の文化弾圧を攻撃している雑文は、一九四〇年代に数多く呉晗によって発表されていた。

(19) 「海瑞を論ず」は、「海瑞、皇帝を罵る」の発表直後に鄧拓が執筆を依頼したといわれている。このことは呉晗に執筆を許すような勢力が存在していたことを物語っている。Peter R. Moody, *Opposition and Dissent in Contemporary China.* Hoover Institution. 1977. P. 167

(20) 呉晗『灯下集』(生活・読書・新知三联書店北京)一六六頁

(21) 呉晗「関于『海瑞罷官』的自我批評」(『人民日報』一九六五年一二月三〇日)

(22) 呉晗「前言」『灯下集』五頁

(23) James R. Pusy, ibid. P. P. 23—29

(24) 呉晗「厚今薄古和古为今用」『灯下集』六三頁

(25) 同上六四頁

(26) 呉晗は「关于評价历史人物的一些初步意見」『灯下集』一八六—二〇〇頁において、歴史上の人物を評価する規準を次のように規定した。第一に歴史人物を評価するには、当時の人民の利益から出発しなくてはならない。第二に、史料を区別する

こと。およそ当時の歴史において役割を果した人物や事件は、当時とそれ以後の時代とでは異った評価が出されるのが必然である。第三は、出身階級は歴史人物を評価する唯一の条件ではない。第四は、人物を論ずる場合、その政治的言動と役割から評価すべきであって、単純に個人の生活からはじめるべきではない。第五は、今日の我々の意識形態を古人に押しつけてはならない。第六は、事実にもとづいて真実をもとめ、誇張に反対すること。第七は、古を今の用になすのが歴史である。第八は、歴史人物の評価には、全体の歴史の発展から出発しなければならない。ここに呉晗の「歴史主義と歴史観」がのべられていた。(邦訳『新中国の人間観』勁草書房一九六五年、二〇六～二四五頁)

(27) 呉晗「再談历史剧」『春天集』(作家出版社一九六一年) 一五二頁

(28) 呉晗「神仙会和百家争鳴」『春天集』二五九頁

(29) 同上二五八頁

(30) 姚文元論文二〇一―二一八頁

(31) 呉晗『海瑞罷官』(明報月刊第三期附録) 二一頁及び James R. Pusy, ibid. P. 35

(32) 同上 一九頁

(33) 戚本禹「海瑞罵皇帝和海瑞罢官的反动「实質」(『人民日報』一九六六年四月二日)

(34) 注(25)参照、呉晗の歴史観は、注(25)でわかるように階級闘争を歴史の原動力と見なすものではなかった。

(35) 姚文元論文二一一頁

(36) 呉晗は、百家争鳴時期に沈黙を守っていた。そして一九五九年以降、再び発言しはじめるということは、毛沢東の支配力の低下という状況と密接な関係があるものと思える。

(37) 姚文元論文二一八頁

## 第三章

(1) 『紅旗』「关于百家争鳴的一个問題」一九六一年六月

(2) 陳毅「对北京市高等院校应届毕业学生的讲話」(『光明日報』一九六一年九月三日)

(3) Merle Goldman, "The Unique "Blooming and Contending" of 1961 - 62". *The China Quarterly*, 1969 年 No. 37. p. 61

(4) Merle Goldman, ibid. P. 69

(5) 康濯「試論近年間的短篇小説」(『文学評論』一九六二年五号、一二—二九頁)

(6) 邵荃麟の演説は発表されていないが『文芸報』(一九六四年第八・九合併号)において、邵荃麟批判がなされその中から邵荃麟演説の概要がわかる。

(7) A. Doak Barnett. *Uncertain Passage ; China's Transition to the Past · Mao Eye.* The Brookings Institution. 1974 (邦訳『中国』—毛沢東以後への過渡期—石川忠雄・山田辰雄共訳二三三頁)

(8) この時期の鄧拓の社会主義建設へのアプローチは、Peter R. Moody ibid. p. p. 167—189 に詳しい。ここからわかることは鄧拓は学問・専門技術を奨励しているが、それは呉晗が主張した学問の真の自由ではなく社会主義建設の道具となるべき目的をもつものであった。

(9) Merle Goldman, The Chinese Communist Party's "Cultural Revolution" of 1962—64. *Ideology and Politics in Contemporary China.* University Washington Press. 1973. p. 219

(10) Merle Goldman, ibid. p. 221

(11) 周揚の言動の中には、十中全会以後毛沢東の要求に答えるものが何もなかった。マール・ゴールドマンによると周揚は自己批判をおこなったが、その中で彼は文学作品の中にある破壊的な傾向に警戒していなかったことは認めたが文化領域は根本において正しいと主張したという。

(12) 一九六四年の楊献珍にむけられた整風運動は、以前の整風運動にくらべ、非常にゆるやかなものであった。ここにおいても党宣伝部の優柔不断な態度がうかがわれる。それは楊献珍を弁護する論調も存在し、同時に批判されていた邵荃麟らの文化官僚も修正主義者のレッテルをはられることもなかった。

(13) 文化大革命直前の毛沢東と彭真の対立の中にこうした毛沢東のいらだちを見出すことができる。特に呉晗の処理をめぐる毛沢東の執拗な要求には彼独自の危機感がうかがわれる。

(14) Byung - Joon Ahn. "The Politic of Peking Opera 1962—1965." *Asian Survey* December. 1972, p. p. 1066—1081

(15) Alan P. L. Liu. *Communication and Natinal Integration in Communist China.* University of California Press. 1961 (邦訳『中国の政治とコミュニケーション』慶応通信七四頁)

(16) 各新聞の姚文元論文の扱い方及び論争の展開は、李又寧博士著『呉晗傳』に詳しい。八九頁

(17) 彭真の立場・態度は、前掲 Byung-Joon Ahn 論文に詳しい。

(18) 『祖国』一九六九年一月一日、アラン・P・L・リューの論文にも引用されているこの個所は、毛沢東が呉晗と党幹部に一線を画していることを示すものであろう。呉晗に対するこのような扱いは彼にむけられた批判の中に数多く見出すことができる。例えば史紹宾は、呉晗の一連の作品は右翼日和見主義分子に資本主義の反動政治綱領を提供したものととらえ、呉晗を資産階級に存する人物としてとらえている。「評呉晗的『投槍集』」

(19) 第二章注(19)参照

## 第四章

(1) Alan. P. L. Liu. ibid. p. 66

(2) 同上六一頁

(3) 一九六三年にはじまった「雷鋒に学べ」の運動は、軍隊から始まったものであるが徐々に民間に広まっていく。アラン・P・L・リューは党宣伝機構が毛沢東の指導を支持しなかったことに対する暗黙の非難と解釈できるとのべている。

(4) 同上七八頁

(5) James R. Pusy, ibid. p. 69

(6) 呉晗『海瑞罷官』一九頁

(7) 李又寧博士論文一一一頁